

## 第七章 祐理名さんの秘密

1.

——昔の夢を見た。

伊吹がまだ小学三年生の頃だった。父親が学会に出るのに連れて行かれて、伊吹はニューヨークに行った。そこでさらに父親に付き合わされて、メトロポリタン歌劇場で上演されていたオペラ『カルメン』を見る羽目になった。

羽目になった、というのは無論、何の興味もなかったからである。そのころの伊吹は非ユークリッド幾何学の方がよほど面白く、大昔の音楽を大昔の物語と共に上演する舞台など、微塵も意義を見いだせなかった。おまけに父親と一緒にいるのだから、最悪である。父親の方も「知っておくべき教養」以上の価値はクラシック音楽に見出してないしなかったが、例によって近隣大学の教授連との交際、という最重要の用件があったため、観に行くことにしようだった。

ところが——予想外にも、伊吹はその舞台に熱中することになる。

面白かったのだ。理由は全く分からなかった。物語といえば、奔放な女性が自らの奔放さによって身を滅ぼす、という、ただそれだけの話だったのだが、伊吹はその三時間以上のオペラをじっと注視していた。後から聞けば、主人公カルメン役は、この役を当たり役としていた大変有名なオペラ歌手で、その夜の公演も絶品だったらしい。一挙一動、踊りに表情、歌の全てが、情熱的で自由、破滅的で愚かなカルメンを表現しきっていた。オーケストラも乗りに乗り、素晴らしい演奏だった。舞台は万感の拍手と共に幕を閉じた。

その後は、父親の付き合いに付き合い合われるといううんざりする時間だったのだが、珍しく興奮している伊吹のおねだりに従って『カルメン』のCDを父親が買ってくれた。その上、父の同僚の計らいで、終了後の楽屋に案内してもらい、カルメンや他に気に入った闘牛士役の役者と会い、CDにサインまでもらうことが出来たのである。このCDは今でも大切に取っている。伊吹としては珍しく、善い思い出だった。

ふと気づくと。

伊吹は、カルメンの衣裳を着て、舞台上に立っていた。

自分の胸を見てうんざりする。豊満で男を誘惑するのが得意なカルメンとは似ても似付かない残念な身体がそこにある。しかし仕方がないので、フラメンコを踊ることにする。

眼鏡はすでに外してあった。周囲の女工仲間の踊りに合わせて舞うと、どこからか拍手喝采が聞こえる。男たちの猥雑なかけ声が聞こえる。周囲の暗闇の中からは、闘牛士の歌が響いてきた。次第に気分が高揚してくる。すると、不意にドン・ホセが現れる。

彼は顔に、仮面を付けていた。謝肉祭で使うもののように派手派手しい。顔の見えない彼は、伊吹のそばに跪くと、彼女の足にキスをした。そうして、彼は伊吹の顔を見上げている。不適に笑みを浮かべている様子だった。

同じく次第に興奮してきた伊吹は、勢いに乗って、その黒髪のドン・ホセを押し倒した。そして身体を絡みつかせ、擦りつけた。自分が何を考えてこんなことをしているのか、自分でも分からない。身体が勝手に動いていた。彼の首筋に口づけをし、開いた彼の軍服の中の胸にもキスをする。けれど、伊吹自身は現実には誰ともキスをしたことがないので、やり方が妙にぎこちなくなってしまう。

それに応じてきたドン・ホセは、徐々にエスカレートしてくる。あらぬところに口を付けてくる。伊吹の腕を押さえつけて、逃げられないようにしてくる。

伊吹の頭の中に残っている理性は、彼を拒絶している。しかし身体が、彼に抵抗してくれない。むしろ歓よろこんで受け入れてしまう。そうするうち、伊吹も段々、心地よくなってくる。心と体が矛盾し、分離し始める。そんな淫らな行動を取っている自分を、他人のように受け止めている。

そうして彼が、伊吹の胸にキスをしたとき。

彼の仮面が、伊吹の服に引っかかって取れた。

もちろんその下には——吉野の顔があった。

\*

伊吹は、目を覚ました。

しばらくそのままじっとしている。それから、今の今まで自分の見ていた夢を思い出して、伊吹は顔から火が出るほどに赤面した。

自分ともあるうものが、何というひどい、品のない夢を見たことか。まさか願望夢だろうか。いやいや絶対に認めたくない、と布団を被ったまま、一人懸命に首を振る。

その時。

布団の中の胸元が、妙に温かいことに伊吹は気づいた。

自分の掛け布団を、バツと捲る。

中では——隣で寝ていたはずのすうくんが、ご丁寧に伊吹のパジャマの上着のボタンを外して、乳首に吸い付いていた。

口がもぞもぞと動いている。

一気に顔に血が上る。

「……にやあああああああああああああああああああああああああああああああああ  
あああああ！」

家族全員が、午前六時に起床した。

2.

「よつきゅーふまん、やろ？」

「違う。断じて違う」

朝の洗濯物を裏庭に干している紅葉の隣で、壁にもたれかかった伊吹は、はつきりと首を振る。『るーじゅ』で道成寺刑事の話聞いたあの日から、すでに一週間が経過していた。

今は朝の八時半で、これぐらいの時間ならまださほど暑くもなく、蟬も鳴きだしてはいない。ほどよい風もあり、妙な熱を持った頭を冷やすにはちょうどよかった。

ちらりと見ると、草むらではすうくんが、バツタを追い回して遊んでいる。朝のことを思い出すと、また胸の辺りがむずむずした。同い年ぐらい

になった時のあの凛々しい彼の姿を思い出すと、次第に顔が赤らんでくる。

もちろん出会った頃から相も変わらず、伊吹はすうくんのことを毎日お世話している。というか、まるで母子のようだった。朝一緒に起き、服を着替えさせ、朝食を一緒に食べ、一緒に歯を磨き、顔を洗い、日中はすうくんが、伊吹の後について回っている。不思議と面倒くさくは感じず、身近に小さな子どもがいるというのも、悪くないものだ。と伊吹は感じていた。すうくんが泣いたり癩癩を起したりはほとんどしない子である、ということも大きいのだろう。風呂も毎晩一緒に入り、一緒に寝ている。

間近でその子どもながらも整った顔を見て、くっついて過こしているとき、時折何となく、伊吹は顔を赤らめてしまう。胸がドキドキする。この感情がなんなのかは、伊吹自身にもよく分からない。

「ほんなら何なん。吉野くんのこと考えて、エッチな気分になつとるだけやろ。別に普通やん」

パン、とタオルを景気よく鳴らすと、きよとんとした眼で紅葉は伊吹を見る。さつきから、今朝なぜ絶叫したのかを、紅葉に説明していたのである。あんなひどい夢の内容、紅葉ぐらいにしか話す気にはなれなかった。動揺した伊吹は、どもりながら続ける。

「ふ、ふ、普通ってそんな、エッチなこととか、まさか」

「何言うてんの今さら。もみじもお姉ちゃんももう十六やに。その気になつたら子ども産めるやん。エッチなことぐらい、普通に考えるやろ？」

「わ、私はそんなことはない。絶対」

「そんな胸張って言わんでええやん。えー。もみじは時々なるよ。エッチな気分」

フフフ、と紅葉は可笑しそうに眼を細める。伊吹は口籠もった。

「……じゃ、じゃあそういうときどうするのだ」

「えー？ ないしょ」

紅葉は余裕綽々で、鼻歌でも歌い出しそうな雰囲気だった。どうするか本当に分からず、伊吹は沈黙する。論理的な思考や発想に関しては幼い部分の多い妹だったが、こと「生きる」ということそのものについては、伊吹より紅葉の方がよほど大人びているように思える。

考えてみれば、伊吹は家事の一つすらも出来ない。掃除をしようと思え

ば部屋を水浸しにし、料理を作ろうとすれば炭を量産し、洗濯をすれば洗濯機を破壊する始末である。カリフォルニアに住んでいた頃は、あの吝嗇な父親がハウスマイドを迷わず雇ったほどだった。それと比べれば、「人間」としてちゃんと「生きている」のは、紅葉の方だと言わざるを得ないだろう。自分はただ、理屈ばかりだ。ここ数週間で、伊吹はそう思うようになった。

——一体どう、「生きれば」いいんだろう。

このところ、伊吹はすっかり自分を見失っていた。あれほど興味を持って読んでいた理論物理の本、ランドールやウィッテンの著作に、すっかり魅力を感じなくなっていたのだ。理解できなくなったというわけではない。ただ、ヴィヴィッドでなくなったのである。日本語で言えば、生気を失っている。従って勉強も、ろくすっぽ出来ていなかった。何が原因なのかは、全く分からない。これが一時的な気の迷いなのか、それとも本当に関心がなくなってしまったのかは、自分でもはっきりしなかった。

——これじゃ、エレーナよりたちが悪い。

吉野とももう一週間以上会っていないかった。このところやったことといえば、あの列車事故の現場検証に立ち会ったぐらいである。数日前に警察に呼び出されて、事故が起きた地点に昼間、刑事に連れられ見に行った。事故車両はもちろんもう片付けてあったので、刑事の質問に答えるばかりになる。結局こくこくと、マリオネットのように頷くだけだった。これといった新発見もなく、熊のせいである、という結論に落ち着いたようだった。再度の聴取も済ませ、この一件はもう、これでおしまいらしい。

それ以後は、特に何もしていなかった。家において、すうくんの世話をし、それで終わりである。生活に張りがなく、ただだからだとしていてだけで時間が過ぎていく。目指すもの、目標が見えない。何をどうしたらいいのか、もう見当も付かなかった。

すると。

「……あああああああああああああ！」  
突然そんな女性の叫び声が表から響いてきて、伊吹は身をびくりと震わせた。山門の方から聞こえたらしい。何かとそちらを見ると、匠雄や他の僧侶たちが駆けつける足音も鳴っていた。中年の女の人が、あられもな

く泣き叫んでいる様子だった。

「……梅田さんの奥さんです」

二人が目を丸くして泣き声の方角を眺めていると、ちょうどそのタイミングでお手伝いの祐理名さんが、裏口から洗濯かごを抱えて出てきた。彼女は冷たい声で言う。

「二日おきぐらいで、いらつしやいます」

ひたすら無感情な彼女は、この世の全てがつまらないとでも言わんばかりの表情で洗濯物を干している。フルネームでは、茨木祐理名さんという。

確かまだ二十四ぐらいのはずであり、相当な美人で、色白で、スタイルもよく、仕事も出来るという本来なら文句の付け所のないお手伝いさんなのだが、残念ながら大切な何かをどこかに置き忘れてきたかのように感情が見あたらない人だった。もっぱら黒い服を着ているし、まるで魔力を失った魔女のように時々見えた。

「あー、あの、娘さんが先週行方不明になったって人やる？」

「そうです」

伊吹が尋ねると、素っ気ない応えが返ってくる。以前から色々と気になっていた伊吹は、彼女に聞かれないよう紅葉を庭の隅に呼び寄せると、そつと小声で訊いた。

「前々から訊こうと思っていたのだが……祐理名さんは一体どういう人なのだ？」

「ああいう人やに」

「いやそういうことじゃなく。どういうきっかけでここに来たのかとか、どこの人なのかとか、元からああいう人なのかとか」

「うん。前からああいう人。最初の頃はおじいちゃんめっちゃ怒ったよ。きっかけは……何なんやろ。二年ぐらい前に突然お手伝いさん、っていうて来てな。おばあちゃんが年取って家事しんどなってきたから、その代わりに働くようになったん。どこの人かは知らん」

「知らんって……気味悪くないのか。自分の家に何者か分からない人間がいて」

「はあ。別に」

ぽかんとして紅葉は首を傾げる。伊吹は頭が痛くなった。

ちらりと彼女の方を見てみると、洗濯物干しをしている祐理名さんの足下に、すうくんがまとわりついて遊んでもらおうとしていた。どうやら捕まえたバッタを自慢したいらしいが、祐理名さんは全く相手にする素振りも見せていなかった。

すうくんは不思議と以前から、彼女によく懐いていた。そばにいないと思つて伊吹が辺りを探すと、祐理名さんの後について歩いていることがある。いつ見ても相手してもらっていることはないの、なぜ彼女にあんなにくっついて廻っているのかと、伊吹は首を捻っていた。

やがて洗濯物を干し終えた彼女は、黙って裏口へと戻っていく。後ろ姿もモデルのように美しく、田舎の寺のお手伝いに納まっているのがいかにも異様に思えた。

「……ねえねえ、お姉ちゃんたち」

その時、彼女が立ち去るのに合わせるようにして、裏口の影から小さな二人がこそそと現れた。みわと、ほたるである。

中学二年のみわは、夏に入ってから毎日のように学校のプールやら海水浴場やらに行っているため、スクール水着の跡以外は全身真っ黒に日焼けしていた。ニイツと笑うと歯だけが白い。一方、妹の方はラジオ体操に行く他は、家で児童文学やファンタジー小説ばかりを読んでいるため、雪のように白い肌のままだった。

悪巧みをしている顔で、みわが言った。

「今ちよつとーいーい？」

「ダメだ」

「まあそう言わず♥ あのさー、祐理名さんの秘密って知ってる？」

お調子者のみわは、いつもと同じようににやにやと得意げに話している。こういうときは大体ろくでもないことを考えているのだ。一方、ほたるの方は気が進まないようで、姉の後ろにびったりとくっついて、家の中に戻ろうとその服の裾を小さく引いていた。

伊吹は怪訝な顔をする。

「秘密しかないような人だろう」

「でしょー！ 気になっちゃって。だからこの度、この名探偵みわが調査してみましたー！ ぱちぱちぱち」

訳の分からないことを言いながらみわはズボンの尻ポケットから小さな黒手帳を取り出すと、ページを繰って、その調査結果とやらを読み上げました。

「六月三十日、対象者は今日も昼過ぎから外出の用意を始める。誰にも気づかれないように細心の注意を払いつつ、服を着替え、髪をほどき、鞆の中に道具を詰め込む。その中には明らかに……一本の鉦があった。昼過ぎの一番目立たない時刻にこっそりと家を出る。ノーメイク、Tシャツにジーンズという地味な服装。本来ならさらに追跡したいところではあったが、あいにく期末テストを明日に控えていたため、靴を履こうとしていたところを母親に見つかり、説教される。その後、夕食前になって、いつの間にか彼女は帰ってきていた。しかしまた再び服を着替えている。不審。翌日のテストはさんざんだった……どう、いぶき姉？ 分かった？」

「ちーがーうって！」

再び大声を出すと、みわは手帳をぱちんと閉じる。

「この怪しい行動！ 謎の多い前歴！ 絶対あの人にはなんかあるって！」

こんな感じで月に一回月末に、必ずお寺を抜け出してどこかへ行くんだよ。鉦を持っていたのもホント。しかも外出するときは、おばあちゃんにもおじいちゃんにも誰にも断らないの。こっそり。いつの間にか。秘密の裏があるに違いないよ……」

「別に外出ぐらい好きにしたらいいではないか」

「それだけじゃないんだってば。一人でこっそり預金通帳を確認してたり、誰かと携帯で、それも標準語で電話してたり。一回町中で歩いてるのを見かけたときなんか……怪しげな、目つきの悪い、指名手配犯っぽい顔の男の人と何か話してたんだよ！」

どんな顔だ、と伊吹は内心ツツコミを入れる。

「しかもお母さんに訊いたんだけど、誰が祐理名さんをウチに連れてきたかって、実ははっきりしないんだって。ばあちゃんですらないらしいの。謎が多すぎるんだよ。だからこれは、つまりきつとんでもない悪事を隠してるに違いない！ あたしたちには見せられない本性、毎月裏でこっそりと準備して実行している悪魔の所行！ 警察の捜査の目をかいくぐり、



彼女は犯行を重ね続けるのであった……」

みわは早口でまくし立てた。ほたるが後ろで、みわの袖を引く。

「お姉ちゃん、もうやめへん？ 怒られるよ……」

「ほたるは黙ってなつて。いぶき姉、頭いいからここまで来たらもう分かるでしょ？」

「分からんし分かりたくない」

「勘が悪いな。犯人だよ……犯人！」

「何のだ」

「あの、連続殺人事件の！」

自信満々にみわはそう宣言した。伊吹はやる気なく肩を落とす。

一週間前なら、ほたるの言うとおりに怒っていたかも知れないが、今となつてはもう、何を言う気も起きなかった。

みわは自説を滔々と語り出す。

「怪しいじゃん怪しすぎるじゃん祐理名さん！ こんな辺鄙な町のお寺にあんな超絶美人がお手伝いさんなんてさ、絶対おかしいって。だからたぶん、東京辺りで最初の事件をやらかしちゃったんだよきつと。あの冷酷な顔で、何人もの男たちを毒牙に掛けて殺めていって、もう東京にはいられなくなったの。それで逃げてきた祐理名さんは、うまいことうちに潜り込んで二年が過ぎたわけ。でも一度味を占めたら忘れられなくて、また新たな犯行に手を伸ばしちゃったんだよ！ 妖艶な美女が閉鎖された田舎町で繰り返す猟奇連続殺人……いや、ロマンチックだよねー」

聴いているだけで毒気に当てられそうになった伊吹は、辛うじて言った。

「……金田一耕助だったか？ 父親の本棚に何冊かあったから、ぱらぱら読んだが」

「ふえ？ 知らないよそんなの。違うって、綾辻行人だつて。館シリーズ」  
後は二階堂黎人とか、と当たり前のようにみわは言う。これでも意外と読書家なのだが、読むものに過度な偏りがあるのが少々困りものだった。あいにく未読の伊吹にはよく分からない。

伊吹の印象では、例の鬼面の事件は「猟奇殺人」と呼ぶにはいささか淡泊に過ぎる事件だと感じていた。しかし実情を知らないみわには、そんなドロドロの本格ミステリーに見えるらしい。確かに、新聞やニュース

で煽っている話だけでは、そう思ってもおかしくないのかも知れなかった。人気の少ない田舎町で連続する無差別殺人、首の切断、鬼の面、正体不明の犯人。おどろおどろしい要素が勢揃いしている。妄想するのも無理ないだろう。

だが、実際の現場を眼にすると、あの事件の怖さは、そんな猟奇性の部分にはないと分かる。

何とも言えず、虚無的なのだ。

虚ろで、虚しい。

渡邊教授の遺体を見たとき伊吹の胸に浮かんだ印象は、どちらかといえばそんなところだった。

空っぽの人間が、鈍やナイフを振るっている姿が頭に浮かぶ。

一体どんな心情でこんな殺人を犯すのだろうと、そればかりが不思議でならなかった。

「でねでね、いぶき姉」

伊吹の考えることなどつゆ知らず、みわの暴走は止まらない。

「あんまり外出できない祐理名さんは、昼のうちに下調べを済ませて、夜中ひっそりと出て犯行に及ぶ。あるいは、昼や夕方の方に殺してしまうこともあるのかも知れない。そう推理したあたしは、次なる犯行を止めるために身を挺して彼女にアタックする覚悟を固めたのであった」

てわけで行こう、とみわは胸を張る。伊吹は眉間に皺を寄せた。

「行く?」

「今日は七月三十一日。外出日でしょ? 一時半ぐらいには家を出るよ。」

犯行を未然に防ぐためには、あたしの調査力、行動力だけじゃなく、お姉ちゃんの頭脳が必要なんだって」

「お前の頭脳はどうした」

「どっかに置いてきた。だから、これから伊吹お姉ちゃんも一緒に行こう。ね♥」

お姉ちゃん最近ヒマそうじゃん、だったら探偵やろうよ、面白いよ、物理学より人の役にたつし、とみわは伊吹にへばり付いてマシンガンのように言葉を連ねる。ヒマなのを見抜かれているのは痛かったが、物理学より有益とはどうしても思えなかったので、紅葉に話を振った。

「そ、そうだ。こういうことは紅葉に頼んだ方がいいんじゃないか？ 紅葉の方が優しいし、付き合がいいぞ」

「もみじ姉いないよ」

「え？」

みわにそう言われてふと振り返ると、どこにも紅葉の姿がない。

ついさっきまで隣にいたはずだったのに、いつの間にかいなくなっていた。紅葉のいたところには代わりにすうくんが立っていて、真ん丸な眼で伊吹を見上げている。

「みわお姉ちゃんがしゃべり出した辺りで、そーっと家に戻っていったよ……」

ほたるが遠慮がちに言った。伊吹は苦い顔になる。

「裏切ったな……」

「まーいいじゃん。もみじ姉は家事とかで忙しいからさ。よーし、じゃあいぶき姉と一緒に、お昼食べたら事件調査に出発しよー！」

「よー！」

すうくんも一緒になって手を突き上げる。

確かに物理学をやるでもなく、調べ物をするでもなく、かといって高校の宿題などどつくの昔に終わらせていた伊吹が今、ただ家の中でごろごろしているだけのヒマな人でしかないのも事実であった。伊吹はため息を吐く。まあいい。このままだと放っておいても、みわは祐理名さんについて回るだろうから、せめて迷惑を掛けないよう、保護者として付いていこう。

それに、実際祐理名さんが何のために外出しているのか、そもそも何者なのかも気になる。鉈を持っていたことがある、というのも確かに多少引っかけた。もし外出するなら、一度尾行してみるのも悪くないだろう。

そう考えた伊吹は、自分がすっかりただのダメ人間になっていることに気づいて、ガツクリと肩を落とした。

3.

昼を過ぎ、午後一時四十分ごろになって、祐理名さんは本当に寺を裏口から出て行った。そつと周囲を見廻し、誰の目もないことを確かめてから、

道を町の方へと下っていく。服装もみわの言ったとおり、黒のTシャツにジーパン、化粧もしていないという無造作なものだった。年若い女性の外出着とは思えず、実際に目の当たりにしてみると少々不審に見える。疑わしく感じるのも無理ないかも知れない。

彼女が裏戸を出てずっと向こうまで行ったことを確認すると、みわ、ほたる、伊吹、すうくんの四人は、輪を掛けて怪しい仕草でこっそりと後を尾行始めた。生き生きとした手振りで指示を出してくるみわに従い、伊吹は気のないまま続く。

すると唐突に背後から、裏返った声が聞こえた。

「え、尾津野!？」

その声に敏感に反応した伊吹は、おずおずと背後を顧みる。

そこにいたのは、帽子にTシャツというこざっぱりとした服装の、吉野だった。反射的に自分の顔が赤くなってくるのを感じた伊吹は、みわやほたるに気取られないよう、何とか冷静を保って言う。

「よ、吉野か。こ、こんなところで、な、なにをしてるんだ……?」

「いや、ちよつと、山の方に用事があったんだけど……やっぱ尾津野がまだ会いたくないかと思って、裏を通って行ってたんだよ。今は帰り」

この方角から隠野山へ向かうときは、どうしても賀茂寺の前後の道を通る必要がある。確かに表を通れば伊吹と顔を合わせる可能性も高いので、わざわざ裏手を廻ってくれていたのだろう。それがこんな流れで鉢合わせてしまうとは、と伊吹は余計に気まずい思いに駆られた。

しばらく二人は、無言のままに向かい合う。

何を言ったらよいのか分からないまま、曖昧な時間が流れる。

「ちよつといぶき姉! その兄ちゃんも。祐理名さん行っちゃうよ!

見つめ合っていないで早くこっち来て、早く」

そこで幸い、雰囲気も何も気にしないみわが、苦み走った刑事のような表情でそう言って、二人を招き寄せた。その後ろにくっついたすうくんは、みわの表情を真似て、同じように手を動かしている。

ちよつどいい、と思った伊吹は、そちらへ足を向けると早口に言った。

「す、すまない吉野、これからこの子たちに付き添って町の方へ行かないといけない用事があるのだ。だからこれで、じゃあ、また、うん、さよな

ら

あの神社での告白からもう一週間以上が経過しているけれど、正直未だに、どう答えたらいいか、吉野とどう話したらいいか、分からないままなのだ。気に病むことはない、という紅葉の言葉も次第にもっとものように思えてきたが、しかしまだ、伊吹の心中は揺れ動いている。

もう少しだけ考えたい、今はまだ吉野と話をしたくない、というのが、伊吹の今の気持ちだった。だからそのまま、伊吹は逃げだそうとした。

ところが、吉野はすぐに言った。

「……なら、俺も一緒に行つていいか？」

「ふえ？」

真顔でそう尋ねる吉野に、伊吹は思わず妙な声を漏らしてしまう。

吉野は普段と変わらない、落ち着いた口調で続けた。

「俺も帰るところだし。尾津野とも話したいし。いいだろ？」

「うえ、その、え、いや、だって、あの……」

「あーもう、その二人！ 甘酸っぱい思春期全開の会話はミッション成功後にいくらでも出来るから！ 何でもいいからさっさと付いてきて！ あたしたちは行くよ！」

面倒くさくなったのか乱暴な調子でそう言ったみわは、すうくんの手を引いて、さっさと先に行つてしまう。ほたるは少しだけ不安そうな切なげな眼をして、伊吹たちの方をちらちらと見ていたが、やがて諦めたような表情になって、行つてしまった。

俯きがちに伊吹は言う。

「……じゃあ、私たちも、行くぞ」

ふふ、と軽く笑つた吉野は、頷いたようだった。

4.

「……殺人犯？ あの、シャンプーのCMに出てきそうなお姉さんが？」

「しーっ！ 兄ちゃん静かに！ 気づかれるよ」

こくりの市の町中までやって来て、駅前で祐理名さんが『るーじゅ』に入つていくのを見届けたところで、吉野とみわがほぼ同時にそう言った。

ここから祐理名さんまでは百メートルほどの距離があるのだが、みわにとつて凶悪犯は超常的な感覚で追跡者を発見してしまうらしい。伊吹たち五人は今、ロータリーを挟んで店の反対側、駅近くの観光案内板の裏に隠れていた。

どう話したらよいか迷いながらも、伊吹はぼそぼそと吉野に応じた。

「いくらさらさらヘアの美人でも、あんな無愛想な顔ではCMにならないだろう」

「え？ 俺好みだぜ？ 無愛想な美人」

吉野はさらりと言う。少し考えてから勘づいた伊吹は、まだ動揺して顔を赤らめた。

「ど、ど、どうでもいいが。その、えと……吉野は山なんかに行つて、何をしていたのだ。最近は何事も多いし、行方不明者も多発して物騒なのだから、あまり人目のないところへは行かない方がいいぞ」

「心配してくれるのか？ へー。嬉しーなー」

「だっ！ だあかあらあそーいうことではなく！ お、お前、さっきから、私を茶化して喜んでいるだろう！ バカにしてるのか」

「違つて。純粹に嬉しいんだって……ああ、あと、尾津野は動揺してるところが、特に可愛いな」

とどめを刺すように吉野にそう言われて、伊吹はもう全く何も言えなくなつてしまう。周りの音が聞こえなくなつて、何だか頭がくらくらした。みわとほたるとすうくんからは少し離れたところで二人は話しているの、ありがたいことにこの恥ずかしい会話は聞かれていないはずである。

何とかかんとか伊吹は言った。

「……吉野。一週間かそこらで、大胆になりすぎじゃないか？」

「そーかな。でも、恥ずかしがつてないで色々吹っ切つていかないときー。人間いつやりたいことが出来なくなるか、分かんないしきー。言いたいことは言つとかないと。えつと何だ、山だっけ？ 山はほら、あれだよ。鬼の碑を調べに行つてたんだよ」

「ヒ？」

「石碑だよ。本当はあの山にお社があるんだろ？ 尾津野のご先祖様が鬼を封じたつていう。そこまでは参拝できないから、森へ少し入つたところ

に、碑が建ててあるんだよ。前にも何度か行ったことはあるんだけど、改めて見に行ってみようと思ってる」

「お前、本当に鬼が好きなのだな」

内心呆れながら伊吹は言う。吉野は肩をすくめる。

「そりゃあな。俺が提案したわけだし。尾津野、ちゃんと調べ物してるのか？」

「う……最近はおちよつと、忙しくって」

「何だよ。せっかくなんだからもうちよつと調べようぜ。安達なんか、また新しい情報仕入れてくれたぞ。役場のオヤジさんから」

「新しい情報？」

どうも伊吹以外の三人、吉野、紺、澄哉は、変わらず鬼のことについて連絡を取り合っている様子だった。

「おい、安達は尾津野にもメールしたって言ってたぞ。ケータイちゃんと見てんのか？ で、情報っていうのがさ、鬼の目撃話なんだよ。すごくねえか？」

「目撃話？ 何時代のだ。平安？ 鎌倉？」

「現代だよ。先週、この町で」

嬉々として話す吉野の声を聞いて、伊吹はびくりとした。

——鬼を目撃した？

「夜らしいんだけど。八十ぐらいのおばあちゃんがふつと夜中に目を覚まして、何となく、外の様子を見に行っただって。もう夜中だから、周りの家とかも全部真っ暗だよな。で、ちらりと家の畑の方を見たら……その畑に、恐ろしく大きな影が立っていたんだってさ。頭に歪んだ角を生やして、血走った目を爛々と光らせて、それから、鋭い歯を剥き出しにした、異様な化け物」

伊吹は完全に口を噤んでしまった。

吉野のその描写を聞いて伊吹の頭に蘇ったのは——最初に渡邊教授の家へ出向いたとき、庭で最初に目撃した、あの異常な風体の人型の何かだった。

暗い庭の中央で、あの何かは膝を抱えて座り、こちらをじっと見ていた。思い出すと、そののいる空間全体が渦を巻き、歪み、眺めているだけで

その中に吸い込まれてしまうような心地がした。その時感じた心の冷える感覚は、未だに忘れることが出来ない。

——あの「鬼」が、どこかに現れている？

「もちろんおばあちゃんが夜中に目覚めて見かけた話だからな。話半分に分かるべきだとは分かっているんだけど。でも目撃談は、それだけじゃないらしいんだよ。子どもや老人を中心に、町のあちこちで、大きな凶体をした何かが、主に夜に、歩き回っているのを見かけた、っていう話が、役場にいくつも届いているらしい。役場の方ではほら、あの列車の事故と重ねて、それも熊か何かだろうと考えて処理しようとしているんだけどさ。でも安達のオヤジさんはそのおばあちゃんから直接話を聞いたらしくて、『ありゃあ熊なんかじゃない』っておばあちゃんは言っているんだってよ。『鬼だ』って。『鬼が人を食い殺そうとして、探して歩いてるんだ』って言うてるんだって。面白いよな」

それに最近の行方不明を重ね合わせると、ますます納得がいかないかと吉野は面白がるように言う。

吉野は何も知らないのです、こうやって話しているのも単に会話のネタとしてなのだろう、と伊吹は考えた。吉野は、鬼がいれば面白い、と以前から言っているが、伊吹の知る限り、そこまで夢見がちな人間ではない。あくまでお化け・妖怪としての鬼が好きで、だから気楽に、こんな冗談めかして話してられるのだろう。

けれど今の伊吹にとって、この話は冗談では済まなかった。恐らくだが、あいにく吉野の推測はどれも、当たっているのだ。そのおばあちゃんが目撃したのは、たぶん本当に「鬼」だ。さらに下手をすると、人を食い殺そうとして探して歩いている、というのも本当である。最近の行方不明に結びつけて考えるのも——きっと妥当なのだろう。

役場が熊だと考えている、というのも、今となっては怪しい話だった。表向きは熊だ、として発表しているのだろうが、あの道成寺刑事の話を思い出すと、内々にはどう判断しているか分かったものではない。とつづく昔に全てを把握して、何とか討伐しようとしている可能性もある。どうやるのかは見当も付かないし、そもそも討伐という古風な言葉が正しいのかどうか分からないが。



もう何だか、何も信用できないような心地になってくる。

「さて、『鬼はいる』陣営としてはこれを鬼がいる証拠として提出しますが、反対陣営としてはどう反論されますかな？」

「え？ 何が？」

ろくに聞いていなかった伊吹がそう返すと、せっかく戯けてみせた吉野はがっかりして口をへの字に曲げ、そして伊吹の顔を覗き込んできた。

「何がじゃないだろ。尾津野と澄哉は『鬼はいない』陣営なんだから。忘れた訳じゃないだろ？」

「あ、あんまり顔を近づけるな。憶えてるよ。ただ……」

どぎまぎしながら伊吹は言葉を選ぶ。そう、ほんの少し前までは「鬼など絶対にいるはずない」と確信を抱いていたのだ。それが二週間もしないうちに、何もかも受け入れざるを得ないような気になっている。鬼はいない陣営、と言われても、もう今さらピンと来なかった。

ふう、と息を吐くと、伊吹は話を変えることにした。

「なあ、吉野。お前はなぜ鬼が好きなのだ？ なぜ興味を持っている？」

「何でって……カッコイイだろ？ すごいじゃん。力強いし、話も面白いし。この町出身の母さんにちっさいころから昔話を聞かされてる、ってこともあるかもしれないけど。尾津野は好きじゃないのか？」

「私は……鬼は、嫌いだ」

伊吹はぼつりと言った。相変わらずその感覚は、胸の内に確かにあった。

吉野は不思議そうに首を傾げる。

「逆に尾津野は、何で嫌いなんだ？ 今までの人生で、鬼を嫌うような機会がそんなにあったのか？ まあ、尾津野の家ならあってもおかしくないか」

「いや……特に、ないと思う」

具体的にこれといって、鬼にトラウマを負った記憶はなかった。だから伊吹としても、気持ちがあつきりしなかったのだ。伊吹の記憶力でも思い出せないような何かが、あるのだろうか。

すると吉野は、何やら嬉しそうな顔をして、語り出した。

「鬼ってさー、自由じゃん。何をやっても許される、ってゆーかさー。スパーパワーで何でも蹴散らす、じゃないけど、ルールに縛られてないだ

る。不愉快なことがあつたらぶつ潰せばいい、欲しいものは手に入れればいい、面白いと思うことをやればいい。で、人間と同じ欲望も持つてるだろ？ お宝が欲しいとか、美味しい飯が食いたいとか、お姫様を攫っていくとか。悲しいとか嬉しいとか、化け物のくせにすぐ言い出す辺りも、なんか人間くさいんだよ。でも、人間より力があつて、すごいんだ。だから：：なんてゆーかなー。超・人間ってゆうか。超人？ 俺の中ではそういうイメージ。だから好きなんだよなー」

「そうか……私には、よく分からない。ルールに縛られてなかったら、論理が通用しないだろう。私は筋道立った話を通じない相手は苦手だし、不快に感じるから……」

「そこがいーんじゃん。論理を超越した存在。ひよっとすると、善悪を超越した存在。格好良くね？」

「うーん……」

伊吹にはあまり理解できなかった。そういう存在を想像すると、すごく据わりが悪い。気持ちが悪く感じられる。伊吹は正直に、分からない、と吉野に言った。

それを聞いた吉野は、少々わざとらしく肩をすくめて答えた。

「そうか……じゃあひよっとすると、俺と尾津野は相性があんまりよくないのかもしれないな。こんな……」

「い、いや、そんなことはないぞ！ 私としても鬼の伝承はもつときちんと調べてみたいと思ってるし、その点に関しては譲歩する用意もある。だから別にこれだけのことで相性が合う会わないということを決めつけてしまうのは早計のような気が」

慌てた伊吹はわたたとそんな言い訳を口にする。ふと気づいて伊吹が顔を上げると、吉野は嬉しそうな眼をして、伊吹を見つめていた。たちまち伊吹は赤面する。

「お、お前またそんなからかって……」

「いぶき姉！ 吉野の兄ちゃん！ 対象が動き出したよ！」

よいタイミングでみわの声が聞こえた。言われるままに看板から『るーじゅ』の方を覗くと、祐理名さんがドアを開けて、店の外に出てくるころだった。

「よーし、尾行再開！ 行くぞ！」  
「ぞー！」

すうくんはまたニコニコでみわと一緒に手を突き上げている。ほたるはそんな二人を、心配そうに見つめていた。伊吹はほっとしたような疲れのような微妙な気分で、またそんな三人の後に従って、歩き出そうとする。

「ほい、これ」

そんな吉野の声と共に、頭に何かを被せられた。取って見ると、吉野が被っていた野球帽だった。

「日射病になるぞ。帽子は必須」

「……お前はいいのか」

「俺はほら、丈夫だから」

吉野はそう言って、ニツと笑った。白い歯が見えた。

伊吹は口を尖らせ、目をそらした。

5.

駅を越え、町の半ばを過ぎ、祐理名さんの後をこそそとついていった五人がたどり着いた先は、意外にも神社だった。それも、伊吹が吉野に告白されたあの小さな社でない。海にほど近いところにある、大きな岩場を背にした、よく名の知れた神社である。伊吹ですら、何度か訪れたことがあった。

「窟<sup>いわた</sup>戸<sup>と</sup>神社……？」

伊吹は朱塗りの鳥居の前に立てられている案内板を読んだ。祐理名さんは、確かにここに入っていた。伊吹の隣で、すうくんはいつにもましてニコニコしている。みわとほたるは、森に囲まれた神社の裏手にある、見上げるほどの岩壁に気を取られているようだった。

こくりの市の周辺は、地質学的にも特異な岩場を多数持つており、ここはその一つである。雄大な岩場が高々と聳え立ち、そこを囲むようにして、草木が生い茂っている。その全体を御神体とし、遙か昔から神社があったのである。

案内板には、伊吹でも知っているような有名な祭神の名がいくつも書かれていた。ここからほんの少し歩くとすぐに海岸があり、波の音と潮の風が、ここまで届いている。ほたるがなびくスカートと飛んでいきそうになる帽子を押さえて、映画女優のようなポーズを取っていた。

「……何でこんなところに入ったのだ？」

振り返った伊吹は他の三人を見るが、全員首を傾げていた。ただ一人すうくんだけは、何か懐かしい場所でも見ているかのように、眼をキラキラさせて、大きな大きな岩場を見つめていた。

よく分からないなりに、五人は神社の中へと足を踏み入れる。恐らく防風林も兼ねているであろう立派な松の木や柏の木が、参道を護るようにして並んで生えていた。みわは足音を起こさないよう細心の注意を払っているつもりらしいが、砂利の敷き詰めてある道では何をしようと、ほとんど意味がない。伊吹と吉野は、普通にざくざくと歩いている。

そうして、すぐに本殿の前に出た。一応隠れようと、みわとすうくんは手近な燈籠の陰から向こうを覗き込んでいる。伊吹も社務所の方を見やって、そして、眉を顰めた。

社務所の前では、祐理名さんを取り囲んで、数人の屈強な男たちが何かを話していた。

誰も彼もが、そうそう町中で見かけないほど大柄で、筋肉質の男性だった。見るからに普通の職業の人ではない。顔つきも悪く敵めしく、肩が当たただけで殴りかかってくるのではないかとすら思える。そんな彼らが細身の祐理名さんを取り巻いている姿は、なかなか異様だった。祐理名さんはこちらに背を向けているので、表情は見えない。

「あ……あ、ヤバイよ……」

愕然としたみわがガクガク震えながら呟いた。

「祐理名さん殺られちゃうよ……アブナイ組織か何かバレたんだよ、今までの悪事が……」

どういふ頭だとそういう発想にたどり着くのか伊吹は不思議でならなかったが、しかし実際、危険な状況にも思える。男の中でも一人は、二メートル近いのではないかといいほど背も高く、しかも堅太りだった。祐理名さんの体格では、手で軽く突かれるだけでも怪我をしかねない。彼ら全員、



ようになり、印象ががらりと変わったのには伊吹も目を見張った。今は社務所の前にみんな並んで腰掛け、祐理名さんの話を聞こう、というところである。

社務所の扉が開き、中から一番大柄なあの大漢が、両手に茶盆を持って出てきた。手が大きいので、普通の人の倍の量を持ち運んでいる。気さくな口調で彼は言った。

「はい、お茶とおまんじゅうね」

「あ、ども……」

みわを筆頭に、全員が受け取る。巨漢の彼も、笑みを浮かべると、なにやら可愛らしい顔立ちの人だった。

次第に妙な不満が募ってきたのか、むっつりした表情のみわは、まんじゅうを片手に持ったまま、祐理名さんに尋ねた。

「まー……犯行が目的で出かけてたんじゃないのはいけど。じゃあ月に一回、町まで何しに来てたわけ？ 神社とどういう関係があるの？ このおつきいおじさんたちは何？」

「この人たちは……」

お茶を一口すすった祐理名さんが億劫そうに答えようとすると、代わって吉野が、口を開いた。

「……奉納相撲だろ？」

「ホーノーズモウ？」

頭空っぽの口調でみわが眼をぱちくりさせる。吉野はほら、と言って境内の反対側、木陰になった隅を指さした。台形に土を盛った場がある。

「あそこに土俵があるだろ？ そこで相撲を取って、神様にお納めするんだよ。大体は豊作祈願とか、豊漁祈願でやる。ここの神社で夏のこの時期、毎年やってるんだよ。このおじさんたちは、たぶんそこで相撲を取る人たちなんだろ？」

「ええ。例祭ですから」

素っ気なく祐理名さんは言う。吉野は本当にこういう話に詳しいのだな、と伊吹は感心した。

「打ち合わせをしなければならなかったのです」

「大体、ここらで毎年大々的にやってるじゃないか。この町に住んでる寺

の娘なのに何で知らないんだ？ そのおチビ」

「おチビって何だよ！ あたしはお祭りとか、そういうのには興味ないの！  
都会的なものには関心ないんだから」

そう言って腕組みをしたみわは、そっぽを向く。実際小学生の妹と大して身長が変わらない中学生なのだから、おチビ呼ばわりされても仕方ないのではないかと、伊吹は内心思った。

「そんなことより。その何とか相撲もお祭りもいいよ。でも、何で祐理名さんが、神社に来てるわけ？ そんなラフな格好で皆さんたちを仕切つてさ。他の月も、用もないのにここに来てたわけだし、やっぱ怪しいじゃん。しかも……前に鉈を持って出かけたのを、あたし見たんだから！ まだ犯人の疑いが晴れた訳じゃないんだからね！」

「……私は、この娘です」

祐理名さんは、簡単にそう答えた。みわは、え、と言って固まった。

「この？」

「はい」

「いやあ、祐理名ちゃんは、この神社の神主さんの娘さんなんだよ。お父さんもお母さんも亡くなられて、何年か経つけど」

そこで、伊吹たちの傍らに立っていた巨漢のおじさんが、口を開いた。「神社の管理自体は市と近くの別の神社がやっていて、普段、人はほとんどいないんだよね。ここは護符やお守りをお授けしたりはしていないから。でも月に一度は掃除に来ないといけないから、つてことで、祐理名ちゃんがやってるんだ。祭りの時も、実務は彼女の仕切りだよ」

意外に饒舌な彼を、変な顔でみわや伊吹は見る。それに気づいた彼は照れたように、ああ、僕は小沢といいます、市内でちゃんこ屋をやっています、と言った。

「この町出身の、一応元幕内だね。大して強くなかったけど、この神社から窟里いむらなんて立派なお名前をいただいたから、未だにご縁が深いんだよ。あはは。で、彼女がこの神社の跡を継ぐっていう話もあったんだけど、色々あって今のところ保留になっていて。だから今みたいな感じで管理しているんだよ」

祐理名さんが無口な分、やたらに人がいい彼が、説明してくれたようだ

った。みわとほたるが、はあ、と口を開けて聞いている。

「相撲は『こくりの夏祭り』と同じ時期にやる予定で、僕も出ることになつてるから、よかつたらみんなも見に来てね。祐理名ちゃんが早く、ここを継いでくれるといいんだけどなあ」

「まあ、そのうちに」

祐理名さんはあくまでつれない。みわは、推理の想定外の展開が相次いだらしく、何やらぼんやりしていた。代わってほたるが、遠慮がちに尋ねる。

「あの……祐理名さんも巫女さんの服とか着るんですか？」

「中高の時は着ました」

「めっちゃ似合いそう……」

「それはどうも」

「うちも着てみたいなあ……」

「アルバイトでよければ、正月にでもどうぞ」

「だから。そんなのんびりトークは別にいいんだってば！」

物静かな二人の会話に耐えきれなくなったのか、ハイテンションを取り戻したみわが口を挟んだ。

「じゃあ、鉈を持ってたのはなんだったわけ？」

「ここに置いてあったはずの鉈がなくなってしまったので。一応、警察には届け出てあります」

「なるほど。神社に来てたわけも凶器を持っていたわけも、危険な大男たちに取り囲まれていた理由も分かりました！ よし、それは結構。でも、一つだけまだ謎が残っている……町で会話していた、あの怪しい男との関係ですよ！」

「……？」

祐理名さんは首を傾げる。みわはここぞとばかりに言い募った。

「先月の某日、海辺で夕方、二人きりで話していたでしょう！ 黒服の指名手配犯のような不審な顔つきをした陰の多い悪魔っぽい人！ もう明らかに人を二、三人呪い殺してそうな怪しすぎる、変な人だったよ！ あの人は一体全体ナニモノなの!? ひよっとしたらあの人と組んで、例の連続殺人を……」



「……おや、尾津野さんに吉野くんですか。ご無沙汰しています」  
すると、みわの叫びに被せるようにして、社務所の陰から黒服の男が、すつと現れた。

痩せぎすの身体に尖った顔をした彼は、最前まで演説していたみわを、ちらりと見やる。そして祐理名さんは、その現れた彼を静かに見つめていた。

意表を突かれた伊吹は、目を丸くしてこう言った。

「……宇治川、さん？」

「あー！ この人！ 祐理名さんと話してた怪し、むうぐ」

身も蓋もなく宇治川を指さしたみわだったが、失礼極まりないことを言い切る前に、後ろから飛びついたはたるに、口を塞がれた。野放し過ぎる姉がさすがに恥ずかしくなってきたらしい。白い頬を朱く染めて、暴走機関車を一所懸命止めている。体格差がほとんどないせいで妹に勝てないみわは、むうむう言いながら、その場でばたばたとしていた。

一方、みわ言うところの指名手配犯風である宇治川は、相変わらずの青白い不健康な顔をして、肩をすくめている。急な再会に驚いた伊吹は、彼にとりあえず訊いた。

「こんなところでどうしたのだ？」

「どうもこうも、調査兼祭りへの協力ですよ。神社の例祭は、民俗学の専門ですから。毎年参加させていたでいて、経過を観察しているのです。フィールドワークですね。それと、祭りの内容が伝統と合致するかどうかを確かめる、スーパーヴァイザーのような仕事も。ああそういえば先日は、大変失礼しました。尾津野さん」

「いや、それは別にどうでもいいのだが……」

伊吹はぶつぶつ言っつて、それからそつと、祐理名さんの顔を見た。

宇治川が出てきてから後、彼女はずっと、宇治川の方を向いていた。もちろん彼女のことだから、向いているだけでこれといって表情の変化はない。けれど、どことなく、ほんのちよつと、何となくだけれど、少しだけ頬が緩んだように見えなくもない。いや、伊吹の思いこみなのかも知れないが、見つめているような、気がするのだ。

「民俗学者がこうして民俗に直接関わるといのは、ご年配の先生方は顔

を擧められることが多いのですが、今の時代だと、やらざるを得ないでしょうね。むしろこうした形で、実社会に研究成果を還元していかないと。窟戸神社さんとは元々、うちの渡邊先生が懇意にしています。私もその繋がりで知り合いました。祐理名さんは渡邊先生と、生まれた頃からの付き合いです。いつも実の祖父と孫娘のように親しくしておいででした。ですから、状況証拠に過ぎませんが、犯人とは考えにくいと思いますよ、元気なお嬢さん」

宇治川はそう言つて眉を上げた。あのタイミングで登場した割に、みわの好き勝手な意見演説を、一通り聞いていたらしい。

みわはむうむう言うのをやめて、黙ってしまった。

7.

「殺人犯とはそれはまたひどい」

日陰になる本殿の裏手に腰を下ろした宇治川は、そう言つて肩を揺らした。

「彼女が中学生の頃から僕は知っていますが、優しい人ですよ」

伊吹と吉野は、彼の横に座っている。表では、先程の屈強な男たちが、例祭と奉納相撲へ向けて、準備を進めていた。祭具を運んだり、図面を元に当日の配置を確認したりしている。その中では、他の神社から訪れた神主と祐理名さんが、打ち合わせをしている姿も見えた。みわとほたとすうくんは、そのそばに腰掛けて見学している。土俵を眺めるすうくんは、いつも以上にずいぶんとご機嫌そうだった。

「中学生、ですか？」

吉野が尋ねると、宇治川はええ、と頷いた。

「僕の方が十一歳年上ですから。初めて会ったのは、僕が修士二年、二十四で、彼女が十三の時だったと思います。性格は今と変わらず、誤解を受けやすかったですね。無口で無表情で、物言いはキツイ」

「その時からここに住んで調査しているのか」

今度は伊吹が問う。

「いえ。当時僕は宇宙物理学を研究していたので、単なる旅行です。まあ

すでに、民俗学的なものに興味は持っていたのですが。ここで彼女に出会い、そして、渡邊先生を紹介していただきました」

「……宇宙物理学？」

「そうですね。話しませんでしたか。僕は元々理系です。T大の院をいったん出た後で、今博士課程に在籍している大学の、人類学・民俗学系の修士に入り直したのです。だから出自は、尾津野さんに近いですね。もちろん僕は、あなたほど優秀な人材ではなかったが」

当然のように宇治川は語った。眉を顰めた伊吹はさらに訊いた。

「……なんで理系から文系へ移ろうと思ったのだ？」

「単純に、興味が変わったからです。最初は自然科学の観点から、この世界のことを考えたいと思った。だから物理学を学んだのです。しかしながら、大学院にも入ると、研究室の人間関係が立て込んできます。実のところピュアに研究を行っている人というのは、ほとんどいない。大半の研究者は、珍妙な縦や横の繋がりに押し合いへし合いされ、何を研究するか、何に注目するのか、どこへ発表するかも、政治と圧力によって定まっています。自然科学とはいえ、研究している人間によって、万事が規定されるのです。いろんな人やアイデアが、教授の気分で葬られていくのを僕は見ましたよ。馬鹿らしくなりましてね。自然科学というのもつまるところ、人間の機嫌によって作り上げられていく」

宇治川は淡々とそう話した。

「そこで、ふと旅行した先がここでした。そしてここには、宇宙があったのです」

「……宇宙？ 何のことだ」

伊吹は怪訝に首を傾げる。宇治川は肩をすくめた。

「尾津野さんをご存じないのですか？ この隠野は、民俗学、宗教学的な観点から見ると、非常に面白い土地なのです。仏教、神道、修験道に民間信仰、古くから様々な宗教が、この土地には根付いている。それらが混交して、この土地そのものと融合し、一つの宇宙を作り上げているのです。隠野は、三方を山に囲まれ、海にも面している。山からは隠野川が流れ、海へと通じている。こんな独特の地形を、昔の人々は小さな宇宙に見立てて、信仰の体系を作り上げていきました。外から必要以上の文物が入り込

まないこの地は、京の都からも生涯一度は訪れるべきとして、時の貴族や上皇などが参ることもままありました。当時の参詣道は今でも残っています。そして、その信仰を司っていたのが、一つはこの窟戸神社、もう一つが……賀茂寺です」

「うち？」

突然実家が出てきて驚いた伊吹は、ヘンな顔をする。吉野はあきれ顔で言った。

「どう考えたってそうなるだろ……てか、この前の和尚さんの話に、思いっきり出てきたじゃないか」

「……聴いてなかったから憶えてない」

祐理名さんが賀茂寺に勤めているのも、一つにはそうした繋がりがあつてのことなのだろうか、と伊吹は内心想った。宇治川は話を続ける。

「山の側に賀茂寺、海の側に窟戸神社が配置されています。この隠野という土地そのものが、信仰を元に緻密に作り上げられた、小さな宇宙なのです。そしてそれは、同時に人の生そのものでもある。渾沌の山に生まれた生命は、川を流れ下り、やがて海という浄土へとたどり着く。僕はそれに魅了された。空の宇宙、自然の世界を見る以上に濃密な生が、ここに在る。それで、今の今までこの隠野を調べているのです」

長くなりましたが、要するに、人間に興味が移った、ということなのかもしれませんね、と言って、宇治川はまた、向こうを見る目をした。その視線の先には、祐理名さんがいるようだった。伊吹はそんな宇治川の自分語りに、何となく親近感を覚えた。

少しの間考え込んでいた吉野だったが、やがてこんなことを尋ねた。

「あの、宇治川さん。前にも訊いたことなんですけど……鬼って結局、何なんでしょうか」

「ふむ」

「前にも色々話してくださいって、あれは凄く面白かったんですけど……ただ、俺の中のものやもやしたものがまだ晴れてないというか」

「鬼や妖怪というのは、そういうもやもやしたもののなのですけれどね」

「そうなのかも知れないんですけど、その……結局まとめると、どういうものなんでしょうか。どうしても気になっちゃって。『鬼』っていうもの

の起源は分かりました。でも、それと『鬼』とは何なのか、っていうのは、また別問題というか……」

「ふん。確かに前回は、古い意味合いに遡りすぎてしまったかも知れませぬね。そう。前回のお話は、元を辿っていくと、鬼は自然の中に漂う、カオティックな、渾沌とした何かに行き着く、そうしたものが根底にある、というお話でした。でも吉野くんは、始点ではなく終点に興味があるのでしようね。歴史的な過程を経た後の、『鬼』という存在」

簡単に言いますよう、と宇治川は軽く咳払いをした。

「『人を越えた人』とでも考えればよいのではないのでしょうか」

「人を越えた……」

吉野は呟く。

そして伊吹は、また少々驚いていた。その言葉はつい先程、吉野が看板の裏で言っていたのとよく似ている。吉野の考えも、的を射ていたということだろうか。

「ええ。仏教の影響も受けた鬼という存在は、古い『鬼』とはまた別のものになりました。考えてみてください。化け物は世に多く存在する。一つ目小僧とか、ろくろ首とか、我々が物語でよく見かける化け物はいますね。けれどそれらと、鬼とは歴然と区別されている。もちろん角の有る無し、という指標もありますが、しかしそれら他の化け物と鬼とを分ける違いは、何でしょう。尾津野さん、どう思いますか」

「え……そう、だな。一つ目小僧などは……」

「一つ目小僧の怖いところとは、どこだと思えますか」

「怖いところ？ うーん……あまりよく知らないが。得体の知れないところ、だと思ふ。夜道などに出るわけだろう、そういうお化けは。そこにそんなのがぼうつと立っていたら、何を考えているのか分からなくて、そこが怖いのではないか」

「まさしくその通りです。お化け、妖怪というのは、何を考えているのか分からない、訳が分からないから怖いのです。何故そんな振る舞いをするのか、どうして存在しているのか分からない。気持ち悪い。ぞっとする。でも、鬼はどうでしょうか」

古い『鬼』ではなく、『鬼』です、と宇治川は、伊吹と吉野を交互に見

る。

「鬼女や酒呑童子のような古典でなくとも、たとえば絵本の桃太郎や、一寸法師に出てくる鬼でもよい。彼らはどういう風に描かれていますか。彼らは、感情と意思を持って、襲いかかってくるのです。人を殺し、暴れ回り、人とも思えないような振る舞いをする。しかしながら一方で、その奥底には、我々と同じ気持ちがある。心がある。それが分かる。だから……怖いのですよ」

——理解できてしまうから、怖い。

伊吹はそんな言葉を思い浮かべる。

同時に何故か、父親のことを思い出した。

父親の精気に満ちた強いまなざしが、目に浮かんだ。

「鬼は、理解不能の化け物などではない。以前も言ったように、人はちよつとしたきっかけでもあれば、容易に鬼に成り果てることが出来る。誰もが奥底に、鬼を持っている。我々はみな鬼だ。だとすれば……一見人のやることではない、人間として許されない行動を取る鬼、確かに許されないけれど、しかし我々には、彼らの気持ちを理解することが出来る。何故彼らがそんな行動をしてしまうのかが、納得できてしまう。自分たちが彼ら鬼のようなことをしていないのは、社会とその規範によって制されているからで、ともすれば向こう側へ行つて、鬼になってしまうかも知れない。それが想像できてしまう。自分も鬼かも知れない……だから、怖い」

宇治川は小さな声でそんな話をしながら、じつと祐理名さんの方を見ていた。

視線の先では、祐理名さんの周りに例の屈強な男たち、相撲取りたちが集まって、相談したり、荷物を運んだりしていた。神社の境内には夏の蒸し暑い日差しが射していて、彼らの着るTシャツには、じつとりと汗がにじんでいる。いつも涼しげな祐理名さんの顔にも、珍しく汗が光っているようだった。光景としては、至って牧歌的に見えた。

けれど、宇治川の話の聞いていると、そんな光景であればあるほど、その裏側に、内側に、何が潜んでいるのか分からないような心地になる。不

気味に見えてくる。

伊吹は思う。人間が何人も何人も集まって、そうしてこの社会、世界は成立している。昔のように、お化けや妖怪の類が入り込む類はない。四月にも思ったが——お化けとは、人の恐怖や畏怖、不安を前近代の論理で消し去る、社会的装置に過ぎないのだ。現代には科学がある。お化けは必要ない。

だが——鬼は違うのだ。

鬼は、今もいるかも知れない。

東京にいた頃、伊吹も見たことのある、町の雑踏の姿。幾百人幾千人の人が思い思いの方角へ歩くその中に、鬼がいないという保証はない。何しろ鬼が紛れ込んでいたとしても、ただ見ただけでは区別できないのだ。我々と同じ心を持ち、欲望を持ち、行動を取るのだから。

人を越えた人である、鬼。

人がいる限り、鬼はいなくならない。

「誰にだって欲望はあるのですよ。カオスへ向かう欲動。壊したい、暴れたい、滅茶苦茶にしたい。罪を犯したい、全てをおしまいにしたい。ほら、幼い頃誰だって、暴れ泣き喚いた記憶を持っているではないですか……いわば幼子は、最も鬼に近い」

伊吹は、びくりとする。思わず視線で、すうくんの姿を探す。

「七つまでは神のうち、とよく言うでしょう？ けれど、年を重ねることにそうした欲望は抑え込まれる。失われていく。そうでないと、人として生きていけないから。社会の中に取り込まれるためには、自分の野放図な欲求を消していかなければならない。でも、その欲求の火種は、誰もが胸の内に抱えているのです。そして何かの手違いで火が付いた途端……人は、人を越えてしまう」

そう言って、宇治川は腰を上げた。

「こんなところで、どうでしょうか。吉野くん」

ぼうっとしていた吉野は、声を掛けられてハッと我に返った様子だった。

「あ、はい。ありがとうございます」

「とはいえ、人を越えなければ為し得ないこと、というのもあるでしょう。仕事の鬼、なんて言葉もありますが、もしかしたら超人にならないと新し

いものは生み出せない、世界は変えられないのかも知れない。僕のような凡人は、そんな彼らを、端から黙って見守るばかりです」

それでは、失礼、とあっさり言うのと、宇治川は二人を残して去っていった。

そのまま眺めていると、彼は、土俵際にいた祐理名さんの元へと歩いていく。そして、何事かを話しかけていた。祐理名さんは、こくりこくりと頷いている。周りの大柄な男たちは、しばらくそんな二人のやりとりを、離れた場所から眺めていたが、やがて諦めたような表情になって、各々の仕事へ戻っていった。

そうして、祐理名さんと宇治川は、二人連れだって、どこかへ行ってしまった。

伊吹はそんな二人を、なにも考えずに眺めている。

伊吹の視界の中には、みわの横でぼかんと口を開けている、すうくんの姿があった。

「おい」

いきなり肩に手を載せられて、伊吹は飛び上がって隣を見た。

すぐそばまで顔を近づけていた吉野が、同じように祐理名さんと宇治川のいたところを見ながら、話しかけてきた。

「あの二人って、やっぱりそうなのか？」

「そうって何だ」

「いや、分かるだろ？ その……付き合ってるのか？」

「知らない。二人が知り合いだということも、今日初めて知ったのだ」

伊吹は口を尖らせる。祐理名さんは以前から常人離れた雰囲気をもっている（今から思うと、神秘的、と言いかえることも出来るかも知れない）、男女の関係とか人との付き合いとか、そういった世俗めいたことに関わっているイメージがなかった。しかし、先程からの二人のちよつとした仕草や視線の交わり方を見ると、誰より鈍い伊吹であっても、何かあるのだろうということは想像が付く。

おもむろに、吉野が立ち上がった。そして、両手をポケットに突っ込むと、何の気もないような素振り、あの二人の行った先へ歩いていこうとした。伊吹は咎める。



「どこへ行くのだ」

「そりゃその……ほら、分かるだろ」

「分かりたくない。人のプライベートを侵害してはよくない」

「……ちよっとだけだよ。な」

そう言うところ——吉野はさっ、と伊吹の手を取った。

久方ぶりの硬くごつごつとした吉野の手の感触が、前以上に新鮮に、時めいて感じられた。瞬間的に顔が熱くなった伊吹は、抵抗することが出来ない。幸いすうくんは、相撲取りだというおじさんたちやみわ、ほたると一緒に、伊吹たちのことにはなにも気づいていないようだった。

吉野に手を引かれるまま、伊吹は境内の奥の物陰へと、足音を立てないように歩いていった。

\*

「……どしたのいぶき姉。吉野の兄ちゃんも。顔赤いよ」

祐理名さんたちが来る前に急いで戻ってきた伊吹と吉野は、土俵際へ来るなりみわにそう言われた。顔を見合せてみると、日焼けした吉野の顔も、いつになくほてったように見えた。伊吹自身も、扇ぎたくなるほど顔が熱かった。いつの間にか日も傾き始めていて、橙色の光が境内を照らし出し、懐かしい雰囲気を醸し出していた。

「うひゃく怪しい」

「何がだ」

仏頂面で伊吹が問うと、うっしっし、とでも言い出しそうな表情でみわは笑っている。

「だって〜思春期の男女が夏休みに神社の裏手で二人一緒になつててしかも顔を赤くして出てくるなんてさ、こりや名探偵じゃなくても勘ぐりたくなるって。もー。一体どんなアバンチュールが繰り広げられていたのか、二人はこれからどうなってしまうのか！ 思わず想像の翼を広げてしまうというわけですよまったく」

「みわ、そういうところが紀乃に割と似ている」

伊吹がそう言うてやると、あっさりみわは動かなくなった。伊吹は向き

直って、ほたるに尋ねる。

「それで、今は何をしているのだ」

周りを見ると、土俵を囲んで例のおじさんたちが並んでいる。そして土俵の中には、元関取・窟里だという小沢が、にこにこ笑いながら立っていた。

ほたるは遠慮がちに答える。

「すうくんが、お相撲取りたいって言うて」

「なに？」

そう聞いた途端に動揺した伊吹は、裏返った声で言った。ほたるは続ける。

「みわお姉ちゃんが、これからここで何をするかすうくんに説明したつたら、なんかえらい喜んでしもて。んー、とか、まー、とか言いながら、自分もやりたい、って言うてるみたいで。それをおじさんらに言うたら、ほんならここでちょっとやってみよか、って小沢さんが言うたん」

「あはは、心配することはないよ。ちびっこ相撲なら何度でもやったことあるから。こんなちっちゃい子に怪我させるわけないから、安心してよ。ははは」

元・窟里関はそう言って胸を張り、笑う。周囲のおじさんたちもにっこり笑って見守っている。しかし、伊吹が焦っているのはそういう問題ではない。

ふと気づくと、小沢の反対側からシャツを脱いで上半身裸になったすうくんが、堂々とした態度で土俵入りしてきた。小沢の真似をして、ぐっと胸を張っている。

真ん丸にふくらんだポンポンのお腹が可愛らしいが、伊吹としてはそれどころではない。幸い、あの假面は被っていないなかったので一安心だったが、これからどうなるかを思うと、伊吹は冷や汗が止まらなくなる。

「お、祐理名ちゃん。ちょっと土俵お借りしていいかな。ちびっこ相撲だ」

「ええ、構いません」

やっと戻ってきた祐理名さんもそう答えると、宇治川と共に、何が行われているのか見に近寄ってくる。とりあえずこの全員を止めなければならぬと思った伊吹は、どこから手を付けていいのか分からないまま、口を

開いた。

「ちよっと、待って欲しい」

「どうした？ なんかつたのか？」

腕組みをした吉野が、きよんととして尋ねてきた。伊吹は応える。

「どうしたもこうしたもないから……この取り組みは、なしにしないか」

伊吹としては精一杯の声で周りに向かってお願いをするが、あまり伝わっている様子はなかった。小沢がさすがの貫禄で四股を踏んでみせると、それを真似てすうくんもぺったん、ぺったんと裸足の足の裏を土俵に付ける。そのたびに、男たちの間から笑いが起きた。

吉野が、伊吹の妙な表情に首を傾げている。

「何だよ、らしくないな」

「何というか私は、こういう実務的な問題を解決するのは得意ではない。

お前も止めてくれ」

「別にいいだろ相撲ぐらい。俺も小さい頃やったぜ」

「だからそういう話ではなく」

一向に要領を得ない会話を二人が続けている向こうで、行司を買って出たみわが土俵に飛び乗り、見合って見合って、と声を張り上げている。

そうだ、自分は筋を通せば済むような話ならいくらでも解決できるが、論理だけではどうにか出来ないような問題はとにかく不得手なのだ。そう伊吹が半ばパニックを起こしながら頭を抱え考えたところで、みわの「残った！」という甲高い声が、向こうから聞こえてきた。

顔を上げると――突っ張りを受けて土俵の向こうに勢いよく飛んでいく、窟里の巨体が見えた。

8.

「……祐理名さんたち、何しとったん？」

「え？」

ほたるに小声で尋ねられて、伊吹は少し驚いた声を上げた。

伊吹たちは今、寺への帰途に就いている。夕方のこくりの町を、吉野、みわ、ほたる、すうくんと連れだって、歩いていった。相撲の後は、すうく

んを土俵から無理矢理引つ張り出し、物理学の知識をフル活用してみんなを煙に巻くのに大変な苦勞をしたが、終わってみればそれなりに楽しい一日だったと言えるだろう。祐理名さんは買い物をしてから帰るそうなので、伊吹たちとは別行動である。

吉野に聞かれないよう気を付けながら、伊吹はほたるに答える。

「……何って、何だ」

「やって……さっき宇治川さんと祐理名さん、二人つきりでどっかに行つとつたやる？ その後を、吉野さんと伊吹お姉ちゃん、一緒についてつとつたやん」

「見てたのか……」

ほたるはほんのりと色白の頬を赤らめている。こう見えても小学生の割に、耳聡い方ようだった。姉のみわより、よほど大人びている。

「別に……何もしてなかったぞ」

「うそやん。絶対そんなことないって。お姉ちゃんも吉野さんも、顔、へんやつたよ」

「な、なにを……」

「分かるもん。ほんなん……」

ほんの少し寂しげな顔をして、ほたるは俯いていた。

「……あんな、わたし、吉野さんのこと好きやったん」

「ふえ？」

ほたるが唐突にそんなことを言い出して、伊吹はどう反応したらよいのか分からなかった。ほたるは儂げな顔で俯き、綺麗な囁き声を連ねる。

「吉野さん、かっこええやん。優しいし、頭ええし……前からよく、小学校に野球教えに来とつたから、何遍か見たことあつたん。ええなー、って思っつて。ずーつとあこがれとつたん。でも……吉野さん、お姉ちゃんのこと好きなんやろ？」

「ふあい!？」

不意を突いて言われたので、伊吹はあらぬ声を上げてしまう。少し前を歩いていた吉野が振り返って、怪訝な顔をした。伊吹は慌てて、手を振つてごまかす。

「い、いや! 何でもない!」

「もー、お姉ちゃん……ええよ。分かるもん。吉野さんの表情見とつたら分かる。お姉ちゃんのこと見とるとき、吉野さんめっちゃ優しい顔しとるし……お姉ちゃんの言うこと、何でも丁寧に聞いとるやろ？ あー、好きなんやなあ、って分かって……」

ほたるの話聞いて、伊吹はまた自分にげんなりし始めた。小学五年生のほたるでも、人の顔を見ているだけで、これぐらいの当を得た洞察が出来るのだ。それなのに自分は、今吉野が何を望んでいるのか、そればかりか、自分が何をしたらよいのかすら、分かっていない。一体これまでの六年間の人生で、自分は何を学んできたのだろうかと思う。

ほたるは話を続ける。

「ほたる、お姉ちゃんには絶対敵わんやろ？ せやから……」

「ちよ、ちよっと待て。何でほたるが私に敵わないのだ。ほたるの方が綺麗だし、その、年齢差のことはあると思うが、でも誰だって、ほたるの方が魅力的に思う。間違いない。客観的な事実だ。少なくとも、私が男ならほたるを選ぶ」

「ふふふ」

精一杯の声で伊吹が言うと、ほたるはどこか嬉しそうに笑った。

「ほら、お姉ちゃん優しいやろ……」

「え、いや、これは」

「うん。ええの。でも、伊吹お姉ちゃんは、お姉ちゃんが自分で思ってるよりもずっと、魅力的やと思う」

せやから、もっと自信持って、とほたるは微笑んだ。伊吹は沈黙する。

正直言えば、今までの人生では「お前は自信を持ちすぎだ」と言われる機会の方が多かった。学問や論理に関しては、周囲に伊吹に敵う人はいなかったから、必ず論破できたのである。だからそうした方面に関しては、伊吹は不動の自信を持っていた。

——それがいつの間にか、ほたるに自信なさげに見られるようになっていたのか。

そう思うと、伊吹は自分の心が、不思議に思えて仕方なかった。

「自信か……」

「ほんで、祐理名さんと宇治川さん、何しとったん？」

くるりとスカートを翻し、こちらに向き直ったほたるは、興味津々といった風で問い直した。ひよっとしたら尾津野家の女性の中では、この手のことに一番まっとうな関心を持っているのがほたるなのかも知れない、と伊吹はふと思った。

「だから……言った通りだ。本当にこれといって、何もしていなかったのだ」

「えー……？ どういうこと？」

「その……普通に木陰に移動して、今後のことについて打ち合わせをしていただけだ。例祭をどうするか、奉納相撲をどうするか、神社自体はこれからどうするか。そんなことを、いつもと別段変わらない顔と声色で、話していただけた。宇治川さんが敬語でなかったのは少し物珍しかったが……それぐらいだったな」

実際、客観的に観察して違うところといえば、それぐらいのものだった。これといって何も、隠すべきことはしていない。祐理名さんも普段通り、淡々としているばかりであった。

「ほんまに、そんなだけなん？」

ほたるは訝しんでいる。

伊吹は、どう説明したらよいのか言葉に迷いながらも、こう話を続けた。

「それだけだ。ただ……それだけではないというか。その……普段と変わらないから、余計に、それだけではないように感じられたというか」

「どうということ？」

「説明が難しいのだ」

伊吹は首筋に手を当てる。

吉野と一緒に息を潜めて、本殿の陰に隠れて見たあの二人の姿、宇治川と祐理名さんは、確かにいつもと変わらない様子で話しているだけだったのだが——しかしどうしようもなく、情の強さを感じさせた。普段あまり情が通っているように思えない二人であるだけに、なおさらそうだったのかも知れない。あの二人が互いをどう考えているのか、これからどうしているかと考えているのかもまだ聞いていないけれど、それでも盛夏の青葉の下で言葉を交わしている比較的無表情な男女が、言葉にしないながらも何を思っているのかぐらいは、鈍い伊吹であっても十分に感じる事が出

来た。

そして——すぐ間近にある吉野の息づかいを意識して、どうしようもない気持ちに駆られたのだった。

「……当たり前のことを、当たり前のように話しているから、愛があるのだろうと想像することが出来た」

考えあぐねた挙げ句、こんなぎこちない言い方しか伊吹には出来なかったが、でもほたるは、それで理解できた様子だった。

「うん。何となく、分かる気がする」

ほたるはにっこりと笑みを浮かべて、伊吹と視線を合わせた。

そこまで話したところで、伊吹たちは町中の交差点に突き当たり、赤信号を待っていた吉野たちの一群と、一緒になった。

吉野が伊吹に話しかけてくる。

「ここを右に曲がって少し行ったら、うちがあるんだ」

「へえ……そうか」

「ちよっと、来てくれないか？」

さりげなく吉野にそんなことを言われて、伊吹は大仰に反応してしまっ

た。

「はあ!? なんだ!」

「……そんな怒らなくていいだろ。ちよっと用があるんだよ。イヤならいいけど」

「い、いや別に、私は構わないが……」

そんな二人のやりとりを、みわがにまにま笑いながら眺めている。ほたるは優しい表情をしていた。そしてすうくんは、不思議なほど無感情な顔で見据えていた。

伊吹は何となく——すうくんに申し訳ないような気になっていた。

9.

吉野の家は、比較的大きな一戸建てだった。ガーデニングが楽しめる程度の庭があり、車庫があり、棟自体は二階建て、窓も多く、ちよっど不動産の広告に載っているような、こざっぱりとした家である。東京辺りで

こんな家を建てたら大変なことになるが、こくりの近辺ではそう珍しい大きさでもなかった。まだ築後、そう経っていないように見える。

「おー、いいなー。あたしもこういう家に住みたいーい」

みわがそんな言葉を漏らした。吉野が怪訝な表情を浮かべる。

「賀茂寺の方が広いだろ？」

「広いとか狭いとかそういう問題じゃないのー！ あたしは畳とか障子とか襖とか線香とか仏壇とかそういうのにはもううんざりなんだって。あたしの夢は、東京、だとかこんな家建てたら旦那がぶっ倒れちゃうから、神奈川か千葉辺りにこんな感じの家を建てて、優雅に暮らすの。子どもは四十前ぐらいまでに一人産めばいいから、それまではお上品な奥様の生活を満喫するの。近所のカフェとかに集まってお友達とお話して、週末になったら六本木的美術館とかに行ったりするの。あたしもそこそこに働くのね。若いうちは渋谷とかお台場とかで遊んじやったりして。横浜もいいよねー。ああ、素晴らしき都会。ノット田舎」

「はあ……」

困惑した表情で吉野が漏らす。神奈川や千葉でも十二分に大変な気がしたが、伊吹は黙っておくことにした。そういえば、みわはいつもテレビでやっている「東京デートスポーツ特集！」とか「横浜の絶品スイーツトップテン！」といった番組を熱心に見ていた。お小遣いに余裕があるときは、ファッション誌も買い込んで眺めている。どうも都会に、過剰なまでの期待と羨望を抱いているらしい。名探偵趣味と矛盾する気もしたが、その辺りは別腹なのだろう。

吉野はつまらなそうに呟く。

「別に東京って、そんなにいいものじゃないぞ……」

「えー！ なんだよう。乙女の夢壊さないでよう。吉野の兄ちゃん東京に住んでたの？」

「四年前までな」

意外なことを吉野はあっさり言った。伊吹は多少は驚いたが、以前から全く方言が出ないあたり、生まれはこの地方ではないのだろうとは思っていた。

目を爛々と輝かせて、みわは吉野にまくし立てる。



「ねえどうだった？ 面白かったでしょ？ いいなー。お店も色々あるんでしょ？ レストランとか、劇場とか。芸能人とか見た？ ねーねー」

「……人がいっぱいいるだけの場所だよ」

吉野は不意に——奇妙なほど冷たい声で、そう言った。

ぎよっとしたみわは、眉を顰めて吉野を見ている。明らかにそれまでとは違う声の響きだった。顔も、何かを失ったかのように無表情になっている。ほたるも急なことに、怯えた眼をしていた。会話が曖昧な間が空く。

しかし吉野はそれも意に介さず、おもむろに自分の家のチャイムを押した。ピンポン、という電子音が鳴り渡る。

伊吹は吉野に何が起きたのか分からず、ただ口を噤んでいた。

吉野はドアホーンに顔を近づけると、囁くような声で言った。

「……母さん、俺だよ」

少し時間が空いて、それから、玄関の鍵が開けられる音が聞こえた。

ドアにはめ込まれたガラスの向こうに、ちらりと白い人影が見えた。

「鍵、持たされてないんだ。俺。前に一回なくしちゃってさ。怒られて」

そこでまたいつも通りに戻った吉野は、僅かにはにかんだような笑みを浮かべると、そう言って頭を掻いた。どう返事したらよいか迷いながら、

伊吹はただ頷く。

「ちよっとここで待ってて。取ってくるものがあるから」

そして吉野は、庭の門を開けると、玄関へ向けて一人歩いていった。

「……上がっちゃいけないのかな、これ」

みわが彼の後ろ姿を眺めながら、ぼつりと呟いた。

吉野は玄関のドアを開けて中に入り、後ろ手にドアを閉める。そうしながらもう一度、家の奥に向かって、母さん、俺だよ、秀一、と声を掛けていた。

音を立てて、ドアが閉まる。

しばらく手持ちぶさたになった伊吹とみわとほたるは、所在なげに辺りを見まわしていた。ふと伊吹は、すうくんを見やる。すうくんは今日も、みわの小さい頃のTシャツにズボンを穿いていた。首からは、例の仮面を大事そうに掛けている。あまりにも四六時中持ち歩いているので、見かねた紅葉が適当な穴に、柔らかい紐を通してやったのだった。今は邪魔にな

らないように首の後ろに下げているので、まるで背中に、もう一つの顔があるかのようになっていた。

——どん、という鈍い音が、家の中から聞こえた。

突然のことに、思わず伊吹はびくりとする。フローリングの床を踏み鳴らす音のようだった。あるいは、何かを落としたのだろうか。

家の周囲が静かであるだけに、音は必要以上に目だって聞こえた。遠くの方から、帰ってきた子どもたちの歓声が聞こえるが、その他は近所家のキッチンから漏れる皿の音ぐらいしかない。田舎町というのはとにかく静かなのだ。慣れるまでは伊吹も、その静寂がちよっと嫌だった。

やっとドアが開いて、吉野が出てきた。

「上がってもらえたらよかったですね」

そう言いながら近付いてくる吉野は、手に何かを持っている。見ると、木で作られた細工物のようだった。伊吹に向かって、吉野は言う。

「あのさ、『いぐりの夏祭り』って知ってるか？」

「夏祭り？」

「いぐき姉知らない？ 八月七日にあるんだよ。あの窟戸神社の前の海岸の周りに、屋台とか縁日とか立って、で、花火も上がるんだ。結構綺麗。あたし好きだな」

みわが珍しく褒めて説明してみせた。吉野は頷く。

「そこらにもポスター張ってあるだろ？ 割と大きい祭りで、周りの町からも客が来たりするんだよ。それで……その、よかったら、一緒に行かないかと思って」

吉野にそう言われた瞬間。

伊吹は胸の辺りが、急にむずむずし出した気がした。

「え……一緒って……その……」

「あ、い、いや、二人つきりじゃないぞ。紺とか澄哉も誘うし、紅葉も連れてきたらいいよ」

「なあんだあ。兄ちゃんのビビリ。もー二人つきりで行っちゃえよう。」

せつかくなんだからユーたち二人つきりで行っちゃえよう……むぐう」

ふざけた調子でそう言って茶化すみわだったが、目に余ると判断したほたるに、あつけなく口を塞がれた。またしてもむうむう言って、手足をば

たつかせている。吉野は苦笑いして続けた。

「おチビもほたるちゃんも来ればいい。もちろん、すうくんもな。みんなほっといたって来るだろうけどさ、尾津野だけは、言わなかったら来ない気がして。来る……よな」

少しだけ不安そうな気持ちをにじませて、吉野は確かめた。

動揺のあまり下唇を噛みしめていた伊吹だったが、数回小さく頷いた後、ようやくこう答えた。

「ああ……行っても、いいぞ」

「そっか。よかった」

吉野は再び、はにかんだ笑顔を見せた。

この顔を見る度に、伊吹は矢も盾もたまらない気持ちになる。胸の内的感情が動いて、抑えきれなくなってくる。前と変わらず頬も熱くなっていたが、もう今は、ただ赤面するだけではなくなっていた。ほんの少しだけ気持ちが落ち着いて、徐々にそんな困惑やパニックの感情が、姿を変えつつある気がした。

伊吹は目を落とし、小さく息を吐いた。

「……これ、やるよ」

そのとき、そう言った吉野は、片手に持っていたものを伊吹に差し出した。

それは、木彫りの飾りの付けられた、ネックレスだった。

きよとんとした伊吹は受け取ろうともせず、しばらく吉野の手の上のそれを眺めている。吉野は照れを誤魔化すように、話を続けた。

「いやその……民芸品の店でたまたま見かけてさ。尾津野、こういうの全然興味ないだろ？」

「別にそんなことはないが……付けていく先がないだけで」

「そうなの？ ならよかったけど。あんまり派手なのは好きじゃないだろうと思って、これなら似合うかなって。大したものじゃないんだけど、よかったら」

暮れつつある陽の光の下で見るその細工は、ほどよい陰影を見せて美しかった。ちようど、すうくんの持っている假面を思い起こさせる。

伊吹は黙って、それを受け取った。

「……ありがとう」

「付けてみたら？ さっそく付けてみたら？」

無理矢理ほたるを振り切ったみわが、嬉々として囃し立てる。しかしまたすぐにほたるに捕らえられて、口を封じられていた。若干気まずい思いをしながら、伊吹はネックレスを、首の後ろで留めた。

伊吹のあっさりとした服装に、それはよく合っていた。

「……よかった」

吉野は伊吹を見つめると、にっこり笑ってそう呟いた。

それから伊吹たちは、祭りの当日何時にどこへ集合するかなどは、紺たちと打ち合わせてからメールで連絡し合おう、と簡単に決めると、家へと帰ることにした。

最後に振り返った伊吹は、何とか絞り出すようにして、吉野に言った。

「じゃあ……ありがとう。その、大事にするよ」

吉野は頷く。

「おう……あ、そうだ。忘れてた」

そこでふと、何かを思い出したような顔になった吉野は、何気なく伊吹に近付いてきた。

どうしたのだろう、と伊吹は、すぐそばまで近付いた、吉野の顔を見上げる。

吉野は伊吹の額の髪を軽く分けると——そこにそつと、キスをした。

「んじやあな、伊吹」

笑って言うと、吉野は身を翻して、家の玄関へと走っていった。

ドアの閉まる音がする。

伊吹は、ほう、と小さく口を開いたまま、動けなくなっていた。

みわとほたるも、組み合った格好で伊吹を見据え、何も言うことが出来ない。

伊吹は少しの間、何もせず、ただそこに佇んでいた。

そんな伊吹の姿を、すうくんは少し離れたところから、無感情な顔で見つめていた。

10

ふわふわと、伊吹は帰り道を歩いている。さすがのみわも、何も言っていない。ほたるは逆に、何か言いたくてたまらないかのように口をむずむずさせていたが、もちろん、それだけだった。伊吹はすうくと、手を繋いでいるのだが、もうそのことには全く、意識がいついていなかった。

——なんだったんだろう。  
そう思った。

自分が今、町のどの辺りを歩いているのかも判然としない。ただ山の向こうから、オレンジ色をした光が射し込んできて、周囲の全てが照らし出されていた。眼鏡のレンズの中で、そうした光がぼやけて、景色を彩っている。

——どうしてあんなことが出来るのだろう。

伊吹は不思議だった。吉野は、自分の感情に従って動くことが出来るのだ。特段の理由がなくても、好きな相手にプレゼントをして、キスをしてみたりもする。もしかしたら、私は嫌がるかも知れない。不快に思うかも知れない。客観的な可能性を考慮すれば、やめておくだけの理由は無限に見つかる。それなのに、それらを乗り越えて、吉野は自分の心のままに、行動できている。

伊吹には、そんなことどうすればいいのか、見当も付かなかった。

少しずつ気持ちが落ちてきて、辺りの家の様子なども目に入るようになったところで、伊吹はあることに気づいて声を上げた。

「ああ」

「どしたの？ いぶき姉」

「ん？ いや、なんでもない……」

慌てて手を振って、伊吹はみわをごまかした。吉野の家の前から漠然と感じていた違和感、不安感の正体に、唐突に気づいたのだ。他の家と、吉野の家との違い。

窓に、明かりがなかったのだ。

あれだけ大きな家で、いくつも窓が並んでいるというのに、一カ所も照明が灯されていないかった。そこがおかしかったのだ。普通だったらこんな

時間なら、居間や廊下に明かりを点けているものだろう。それなのに吉野の家は、静かで、暗かった。だからどことなく、見ているだけで不安を覚えたのだ。

ドアを開けて中に入っていく吉野の姿が、フラッシュバックする。

——何か、あるのだろうか。

あまりないことだが、伊吹は他人のことを、真剣に心配していた。

「なあ……伊吹お姉ちゃん」

傍らのほたるから話しかけられて、伊吹ははっと我に返る。

「ん、なんだ？」

「……すうくん、どこ？」

「うえ!？」

ふと気づくと、右手を繋いでいたはずのすうくんの姿が、どこにもない。周囲を見廻したが、目の届く範囲にはどこにもいなかった。それどころか、いつ手を放していついなくなったのかも、全く記憶にない。みわも驚いて言う。

「え、いぶき姉どこに置いて来ちゃったの!？」

「わ、分からない。気がついたら……」

「もー。あんなことの後だから分かるけどさー。ちよつと、どうする……?」

みわにまで呆れられて、伊吹はまたしても激しく落ち込んだ。しかし、落ち込んでいても仕方がない。もうかなり日も落ちてきているので、二人には先に帰っていても構わない。伊吹一人でとりあえず周囲を探してみ、見つかったら携帯で連絡する、とだけ言って、伊吹は二人と、その場で別れた。

薄暗くなり始めた<sup>ひとけ</sup>人気の少ない町を、伊吹は行く当てもなく歩く。昔なら、これぐらいの時間のことを黄昏時と呼んだのだろう。会社帰りらしいスーツ姿の男が、駅からまばらに現れては、町のどこかへ帰って行った。飲み屋も二、三軒しかないこくりの市街では、寄り道をする姿も見あたらぬ。

簡単に見て回れる範囲を調べた後は、駅前の交番に行ってみる。しかし当然、すうくんは来ていなかった。交番のことを教えたこともないのだから、当然だろう。特徴を話すと、警官も探してみる、と言ってくれた。だ

が出来れば、伊吹が自分で見つけた方がよい。警官が捕まえようとしたら、またどんな騒ぎが巻き起こるか知れないのだから。

再び町中を当て所なくさまよいつつながら、伊吹はなぜか、罪悪感に苛まれていた。

すうくんの手を放してしまった、というのも一つある。吉野のキスに舞い上がってしまったって、いつすうくんが逃げていったのかも気づかなかった。普段の自分なら、考えられないことだ。

けれどそれ以上に、もつと感情面での申し訳なさを感じていた。なんとなくか——浮気でもすれば、こういう気分になるのかも知れない。付き合っている相手がいるのに、他の男に手を出されて喜んでいる自分。そんな感覚に、近い気がする。

いや、こんな考えもおかしなものだ。吉野は手を出さなくて適当な気持ちでやっているのではないのだろうか。それ以前に、すうくんはせいぜい五歳児、の外見をしているのだから。そもそも当然ながら、すうくんと付き合っているわけでもない。

それなのに何だか——時々ちらりと視界の端に入った、すうくんの無感情な表情を思い出すにつけ、悪いことをしてしまったような気がしてならなかった。

——まさかそれが理由で、どこかへ行ってしまったわけではないと思うのだけれど。

あの月光の下で見た、凜々しく鬼と戦っていた時の彼の姿も、脳裏に蘇る。

そうして歩き回る中で伊吹は、賀茂寺から少し離れたところの、山の間までたどり着いた。町はここで終わり、この先は、隠野山に入る。木々の生える野への入り口には、緑色の金網が張り巡らしてあって、子どもたちが入れないようにしてあった。一応入り口の扉は付けてあるが、そこにはダイヤルロックの錠が掛けてある。空は夏の夕暮れらしい、紫色の光に満ちていた。

そこに——すうくんが立っていた。

「ああ……よかった」

長い間あちこちを歩き回ってへとへとになっていた伊吹は、ふらついた

足取りで、彼の元へと歩み寄る。すうくんは凜とした目つきで、網の向こうの森を眺めていた。

「どうしたのだ。勝手に行ってはいけない」

疲れた声で伊吹が話しかけても、すうくんは振り向こうとすらしなかった。怒っているのかも知れない、と思った伊吹は、思わずこんなことを言う。

「その……別に吉野とは私は何もなくて、誤解しないで欲しいのだが……」

話しながらも、一体自分は五歳児に向かつて何を言っているのだ、という心地に駆られた。もちろん実際にはすうくんの方が自分より遙かに年上である。しかし——少なくとも人間としては、伊吹の方が年長のはずだ。たぶん。自分が吉野とどうなるかが、すうくんに言い訳を言う必要はない、と思うのだが、どうにも伊吹は、毅然とした態度を取れなかった。

その時。

伊吹は、周囲の光景を見て、四ヶ月前のことを思い出した。

ここは——四月に、伊吹が紅葉と連れだつて、あの社へと向かった場所だ。

そう、二人はここから山に入ったのである。紅葉が曾祖母から聞いたという伝承が正しければ、おおよそこの辺りから山に踏み入れば、社のあるところまでたどり着くことが出来る。今でも金網越しに覗くと、古くからの獣道のような跡がここには残っているのだ。実はもう少し行くと、例の鬼神の伝承を記念した石碑もきちんと建ててある。

そうと分かると、伊吹は紅葉を伴ってさっさとここまでやってきたのだ。ダイヤルロックも古いもので、三桁しかないのもので全ての組み合わせも千通りしかない。傷が多くて数字が薄れている辺りを中心に適当に合わせ、十分もかからずに開けることが出来た。こうして伊吹たちはあの日二人して、夜中に山へと入っていったのである。

——あれが、全ての始まりだった。

今から思うと、あの時の自分の驕り、身勝手さに恥ずかしくなる。なぜろくに何も考えず、あんなことをしてしまったのかと腹立たしくもなる。ひとえにあれをきつかけにして、何もかもがおかしくなってしまったのだ。あの鬼の腕を解放しなければ、化け物が闊歩する町になどならなかった。



人も死なずに済んだ。自分の無思慮に、少し泣きたくもなる。けれどももう、どうすることも出来ない。

——出来ないのだろうか。

ふと、伊吹はそう思った。

——再び、鬼を封ずることは出来ないのだろうか。

幸い、その昔鬼を封じたときに助けとなつたはずのすうくんも、伊吹のそばにいる。もしかしたら何か手を尽くせば、人を襲う鬼たちを、またあの社へ封印する術があるかも知れない。

夢見がちな考えかも知れないが、せめてそれぐらいのことはしないと、自分のやってしまったことへの償いは出来ない。そう伊吹は思った。

「……行くぞ」

伊吹はまた、すうくんに話しかける。もうそろそろ七時だ。帰って夕食にしないといけない。

しかし、すうくんは森の中をじっと見て、微動だにしなかった。

まるでそこに、何かがいるかのように。

不審に思った伊吹は、すうくんと同じ高さに腰を落とすと、暗い森の中を覗き込んでみた。

そこには、大きな大きな、虚ろな鬼の姿があった。

たぶんそれは、以前渡邊教授宅の庭で見かけた、歯を剥き出しにした不気味なあゐの鬼だった。血走った眼に、歯茎が見えるほど開かれた口、針のように立ち並ぶ歯。人型ではあるが、身体は痩せ細った病人のようだった。頭からは振れた角が二本生えていて、乱れた髪が、肩口まで伸びていた。見ているだけで、厭な気持ちで全身を包まれるような気になる。そんなものが、森の中をゆっくりと横切っている。伊吹は、目をそらすことが出来ない。

ただ、違っているのは、その大きさだった。

ひどく大きかった。周囲に聳え立つ木々と、そう変わらない高さがある。庭で見かけたときは、せいぜい大人より少し大きいぐらいだったのに。今や見上げるほどの上背があった。これまで見てきた鬼の中でも、段違いに

一番大きい。

そんなものが、暗い森の中を、行く先を探すように歩いている。

『人と食べる』

そんな声が唐突に聞こえて、伊吹はとっさに隣を見た。

すうくんは変わらず、森の中を見つめていた。しかし今聞いた声は、以前一つ目の鬼とすうくん、いやスクナ様が戦っているときに聞いたのと、同じ響きだった。

「人を……」

伊吹は呟く。大鬼は、森の中を悠然と闊歩している。こちらに気づく気配はない。

伊吹は突然、大勢の行方不明者のことを思い出す。今朝方、寺で泣いていた、母親だという女性のことを思い出す。不明者が急増していると話す、道成寺刑事の言葉を思い出す。

人を、食べる。

——人を食べて、大きくなったのか。

そう思い至った瞬間、伊吹は強烈な吐き気に襲われて、口を押さえてうずくまった。

大鬼は何も気づかないまま、森の奥に消える。

伊吹は、立ち上がることが出来ない。

すうくんは何も言わず、鬼の去った先を、静かに見据えていた。